

「天象研究改正之眞図」 ものがたり

富田 良雄

山本天文台資料に風呂敷に包まれた渡辺治三郎という人物から届けられた大きな星座図と関連資料がある。風呂敷には三つ星に一文字（渡辺星）の家紋が白抜きではいり、結び目には赤字で「非常持出」と書かれた荷札が結わえてあった。この大星座図については『第3回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録』（2012）に「山本天文台資料の中の東洋星図」として紹介した。文化・文政時代に民間で活躍した遊歴天文家朝埜北水（あさのほくすい）が播磨にやってきた折にもたらされたものである。今回は山本に預けられた後のこの資料の経緯についてのべる。



家紋いり風呂敷包



家紋「渡辺星」



入っていた書類

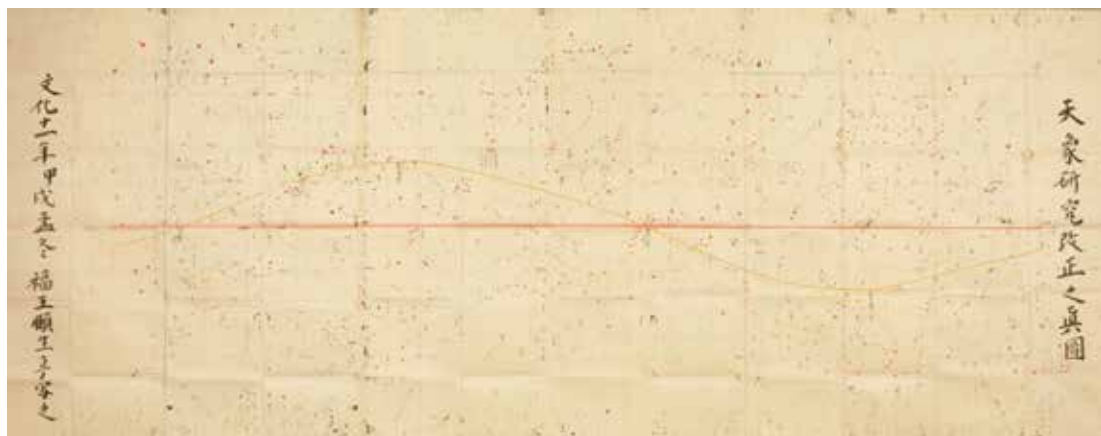
資料一式はその後も渡辺氏に返却されることなく山本天文台で90年近く眠っていた。上記の記事を書いたころから、渡辺治三郎氏の子孫の方と連絡がとれたら事情をお話したいと思っていた。しかし、風呂敷にはいっている手紙には差出人住所として「兵庫県三木町 渡邊治三郎」としか書かれていない。昭和初期にはこれで郵便物が届いたのである。三木市の市役所にたずねても個人情報保護のこともあって教えてもらえないだろうし、おそらく知っておられる方もいないだろうと思う。とにかく三木というところがどのような風土の町であるかを見ておきたいと、2016年の連休の一日（5月1日）知り合いをさそって観光をかねてでかけることにした。そして奇蹟はおこった。

山陽電鉄の新開地駅で神戸電鉄粟生線に乗り換え、新緑の山間を北西にむかう。藤花、ハリエンジュが線路の両側の山の斜面に満開、檜や樅の木の花も一斉に咲いており眼がしょぼしょぼ、鼻もむずむず、喉がいがいが、これはたまらんと感じたころに漸く谷合をぬけて平地にでた。三木駅についたのが12時前であったので、ひとまず昼食をと駅前の食堂などをさがしたが連休中で営業していなかった。しかたがないなあと古い町並みの中を三木城址の方角にむかって歩いていると、大宮八幡宮の鳥居があり本町という町名からもかつて中心街だったところにでた。参道脇の「渡辺写真店」の大きな看板が目についた。思い切って玄関の呼び鈴をおして待っていると、小柄なおばあさんがでてこられた。「昭和の初めころに、このあたりに渡辺治三郎さんという方がおられませんでしたでしょうか」とたずねると、「それは本家の治三郎さんじゃ、本家にいってみるとよい」とのこと、印刷屋をいとなんでおられる本家を教えていただいたのである。だめ元で三木市までできてしまっ

たのであるが、着いて早々にめざす渡辺家にたどりついてしまった。

早速数軒隣の印刷屋を訪問した。会社の看板はあっても表札はみあたらず、あのおばあさんに教えてもらわなければわからなかっただろう。休日であったが店は開けておられ社長夫妻がご在宅だった。経緯をお話ししはじめると、「あの富田先生ですか。3年ほど前にネットで渡辺治三郎を検索したところ先生のお書きになった記事が見つかって、ダウンロードして読ませていただいております。連絡すべきかまよっていたのですが、まさかご本人がたずねてきてくださるとは」と、待っておられたかのような話に驚いた。

朝塾北水の指導をうけて特大の星図を描いたのは渡辺家のご先祖の福王頤生亭（いせい）である。筆者も事前に福王家についてはネットで調べていた。当主の渡辺一（はじめ）氏からお聞きした話もあわせると、次のような流れになる。観世流の流派である福王流の創始が福王家で、もともとは室町後期から戦国時代にかけて三木姓を名乗り、城主の別所氏に砲術師としてつかえながら改姓して福王流の能をはじめた。秀吉によって別所氏がほろぼされたころには、都にでて観世流のワキとしての派をなしている。福王流は現在も大阪に宗家があり、十五世福王茂十郎を名乗っている。地元三木に残った福王家は両替商を始め、後に福王という姓があまりに貴字すぎると渡辺に改姓され現在につづいているとのこと。その折に家紋も「渡辺星」に改められたのだろう。



天象研究改正之眞図（154cm×415cm）

そして文化十一年に朝塾が三木にやってきた時に自邸に滞在させ、近隣の人もさそい入門して菩提寺であった本要寺の本堂で天文の講義を受け「天象研究改正之眞図」を数日ばかりで写した。渋川春海が元禄年間に出版した「天文成象」を意識した名付けで、朝塾はこれをお寺の本堂に広げて天文や暦の話をしたのであろう。現代のプラネタリウムである。地元の人達はその大きさに度肝をぬかれただろうし、天文講話を聴いたあとで実際に播磨の夜空をながめ星座をみたのであろう。渡辺氏からは正長元年（1428）からの渡辺家の家系図と人物紹介を兼ねた冊子『渡辺家』をいただいた。それによるとこの頤生亭は福王弥左衛門（文政13年歿）である。風呂敷包の中の家相占い関係の資料のひとつには「浪華 中井先生門人」とあり、中井履軒をはじめ大阪の懷徳堂の人々とも交流があったことがうか

がわれる。

隣接する小野は江戸時代には一柳氏が治めており、明治になって男爵家令嬢一柳満喜子が建築家のヴォーリズと結婚した。ヴォーリズ夫妻と山本は生涯にわたって交流があり、時間があつたら小野市も尋ねてみたいと考えていたことをお話しすると、「奇遇ですね、その角の玉岡歯科医院のお嬢さんの玉岡かおるさんが一柳満喜子さんの小説を最近出版されたのですよ」とおしえてくださった。



甘党オハラのうどん定食



大宮八幡宮の境内。右が本殿、左が能舞台

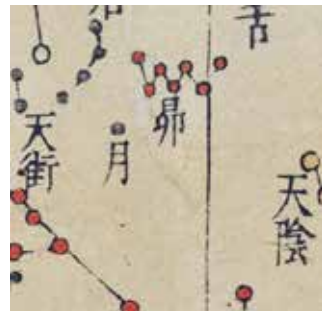
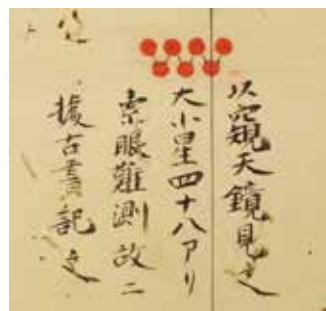
ちょうど昼時であつたのであまり長居をしてもご迷惑だろうから、近くにある当日も営業しているうどん屋「甘党オハラ」を紹介していただいて退出した。おばあちゃん二人がきりもりしているお店のメインメニューは具がいろいろのつたうどん、かやくご飯におまけの赤飯までついたうどん定食が 500 円也。うどん定食をいただいていると、渡辺氏が追いかけるようにやってこられ、「近くの市会議員にこの話をしたら大変興味をもたれ、詳しいことを聴きたいらしいので後でもう一度よってもらえないか」とのこと。食後この奇跡を導いてくださったような気がする八幡宮にお参りをし、広い境内の能舞台の天井にかけてある文字と絵が消えかかった絵馬の写真を撮ったあとで再度渡辺家を訪問した。今度は市会議員さんをまじえて経緯をお話したところ、「今度の 5 月 5 日に丁度、三木市の図書館を全面改装した歴史博物館が開館する予定になっていて、今のところ目玉になる展示物があまりなくて。オープンには間に会いませんが、その大星座図の複製を作って常設展示にできたら、そして原資料の里帰りを兼ねて企画展などを開催できるといいのですが」ということであつた。こちらとしてもそういうことでしたら協力したいということで一気に話は進展したのであつた。

その後、議員さんに案内していただいて朝埜が頤生亭などの弟子を集めて天文講座を開いたであろう本要寺、三木市観光協会、旧玉置家住宅などを観てまわった。三木は江戸幕府代官所がおかれ、近隣諸藩の政務の出張所のような役所もおかれていた。河川交通も盛んで商業が発達し経済の中心地となっていたそうである。昼前に三木市について 2〜3 時間に思わぬほどの早い展開で物事が進展して、たいへん興奮もし、疲れもした。帰りの電車はまだろみながらの帰路となった。



渡辺治三郎氏（1893－1983、『渡辺家』より） 懇談：左から渡辺一氏、初田稔氏、右端が筆者

あらためて大星図をながめてみると、渋川春海の「天文成象」とは異なる箇所がいくつかあることが判った。一番目立つのは両図ともに赤道は横一文字に描かれているが、あらたに黄道が黄色の線で描かれており、赤道との交点に「冬至日点」「春分日点」「夏至日点」「秋分日点」と書かれている。また北極を含む周極星の紫微垣図はなく、枠外に北斗七星が描かれている。ほかに星座の昴（ボウ、すばる）の下に「以窺天鏡見之 大小星四十八アリ 索眼難測故ニ 抛古書記之」と添書きがある。窺天鏡とは望遠鏡のことでこの星図が模写された文化十一年にはすでに貝塚の岩橋善兵衛が高価ではあるが遠眼鏡を製作して販売していた。朝埜はそれを入手して弟子に覗かせ、昴が望遠鏡で見ると 48 個の星からなることを見せていたのであろう。肉眼で昴の星を探して数えることは難しいので古書によって記したとある。この古書とはおそらく渋川の「天文成象」である。さらに大星図に描かれているほかの星座も「天文成象」に準じているが、省かれているものがある。また名が記載された星座は少ない。



「天象研究改正之真図」の「昴」と添え書き（左）と「天文成象」の「昴」（右）

朝埜北水については中村士著『江戸の天文学者』に詳しく解説されている。朝埜は関東甲信越地方を遊歴し、各所で天文暦学の初歩を講じている。大星図は現在のところ 4 面が確認されていて、三木の星図が時代的には一番古いものである。

今後は大星図の複製の製作と企画展について地元の人たちと協力しながらすすめてゆければと考えている。

参考文献

- ・ 渋川昔尹、『天文成象』、元禄十二年
- ・ 中村士、『江戸の天文学者 星空を翔ける』、技術評論社、2008
- ・ 玉岡かおる、『負けんとき ヴォーリス真紀子の種まく日々』、新潮社、2011
- ・ 『渡辺家』、自家版